



八 冬はつとめて（東の京の巻 下）

「助かった。ありがとう」

「お互い様だ。それより、これを食べろ」

水レンジャーの胸の鐘が黄色く点滅しているのを見て、仲間がお菓子を差し出した。あきらかにパワーが消滅していたのだった。

「すまん」

水レンジャーは袋の中に手を突っ込んだ。ポリポリポリポリ。小気味よいリズム感のある音がする。

「うまい。おおお、これは・・・」

「そう、そばぼうろ、だ」

「ああ、懐かしい」

「さあ、お茶も飲め」

「ありがたい。この湯飲みは・・・」

「清水焼だ。五条坂の店で購入したんだ」

まさに、京尽くしだった。

「これなら、パワー全開だ」

水レンジャーは、右手にそばぼうろ、左手に清水焼の湯飲みを持ち、立ったまま、ひと時の憩いの時間を満喫していた。まさに、京都マラソンのランナーが、砂漠の中のオアシスとも例えられる、水やバナナなどを摂取できるエイドステーションで立っている姿と瓜二つであった。京の文化は、あらゆるところに、細やかなところにまで、浸透しているのである。まさに、文化は細部にあり。水レンジャーが一息ついていると、仲間が声を掛けてきた。

「それよりも、あの巨大な化け物はなんだ」

「東の京タワーと名乗った。都を東に遷都するつもりらしい」

最後のそばぼうろを噛みしめると、口の中に広がる粒々を名残惜しそうにお茶で洗い流し、飲み干した。

「そんなことはさせるものか」

「都は京だ」

「どこにも行かせないぞ」

「俺たちが守るんだ」

塔レンジャーたちが仲間の更なる結束の意志を固めているうちに、バランスを崩していた東の京タワーが元に姿に立ち戻った。

「ふん。この程度で、俺様を倒せると思ったら大間違いだ。これでも喰らえ」

東の京タワーの巨大な足がレンジャーに襲い掛かった。

「よし」

四人は声を合わせると、巨大な足をくぐり抜け、空高く飛び上がった。そして、「京都戦隊塔レンジャー」と叫ぶと、合体した。

「ふん。いくら体だけ大きくなっても、でくの坊には変わりはないわ」

東の京タワーは赤や青など、七色に体全体を光らすと、その光を塔レンジャーに向って放った。

「ま、まぶしい」

塔レンジャーたちに一瞬の隙が生じた。と、同時に、体全体に衝撃が走る。目の前には、東のタワーの巨大な足があった。塔レンジャーたちは吹き飛ばされるとともに、合体していた体が元の姿になって地面に落ちていく。

「大丈夫か」

「大丈夫だ」

「これぐらい」

「何するものぞ」

塔レンジャーたちは何とか体勢を整え、地面に激突することなく、無事、立った。

「それにしてもすごいパワーだ」

「このままでは危ないぞ」

「どうする？」

「だが、この京の街を守るためには闘うしかない」

「その前に内面からパワーだ」

「そうだ。これだ」

全員の声が一致した。

「さっきのお礼だ」

水レンジャーから差し出されたのは、豆大福。

「新しい年を迎えるには、ぴったしだ」

「お互い、もちのように粘り強くなろう」

「だが、これを買うのは大変だったろう」

「ああ。なにしろ、行列が幾重にもヘビがとぐろを巻くようにつながっていたからなあ」

「御苦労さん」

「だけど、その店の近くにある商店街にも和菓子屋さんはあるだろう？そっちの方はどうだ？」

「残念ながら、がらがらへび、だ。人っ子一人いない」

「そんな極端には味は変わらないだろう」

「まあな。だが、人は人が集まる所が好きなのだろう」

「店同士が切磋琢磨することはいいことだ」

「だけど、我々としては、京の都の中のお店が全て繁盛して欲しいけどなあ」

「とにかく、今は、その京の町を守ることが先決だ。平和こそが繁栄の源だ」

「よし、合体！」

声も一致して、塔レンジャーたちは、再び、ひとつに巨大化すると、東のタワーに向かっていった。

「無駄だ。無駄だ」

東の京タワーは合体塔レンジャーを受け止めると、跳ね返す。まさに、横綱相撲だ。跳ね返された合体塔レンジャーは、バラバラになって地面に落ちていくが、途中で、体勢を整えると、再度、合体し、東の京タワーに突っ込んでいく。

「しつこい奴だな。これでも喰らえ」

強烈なキックが合体塔レンジャーのお腹に命中した。

「グヘ」

合体塔レンジャーから、苦悶の声が上がり、再び、バラバラになると地面に落ちていく。それでも、空中で、体勢を整え、再び、合体し、東の京タワーに突進する。意志ある所に力は沸くのだ。

この死闘が何回も、何度も繰り返された。最初のうちは、すぐに跳ね返された合体塔レンジャ

一だったが、次第に、がっぷり四つの体勢にまでになった。

空の上で、合体塔レンジャーと東の京タワーが、まるで、相撲を取っているかのようにくんずほぐれつとなる。京の街の人々は、スマホを片手に写真や動画を撮影し、フェイスブックやインスタグラムなどのSNSにこの光景をアップしている。すごいね！の数がうなぎ上りから、屋根より高い鯉のぼりにまで上昇した。

「はっ、はっ、はっ」

「ひっ、ひっ、ひっ」

「ふっ、ふっ、ふっ」

「へっ、へっ、へっ」

「ほっ、ほっ、ほっ」

空の上から、合体塔レンジャーと東の京タワーの激しい、時には、ほのぼのとした息遣いが聞こえてくる。人々は、お正月に向けての準備をしたいものの、この二体の戦いが気になって準備が進まない。何かあれば、すぐに空を見上げてしまうからだ。この戦いは大みそかまで続けられた。

さすがに、京の人々も、正月準備で慌ただしくなり、二体の戦いにもそれほど関心を持たなくなってきた。それでも、二体は、都の威信と意地をかけて、空中で、がっぷり四つのまま、力相撲で動かなくなっていた。

「ボーン」

と鐘が鳴った。除夜の鐘だ。その音を聞くと、体からゆるゆると力が抜けていくのがお互いにわかった。そして、人々は、そんな二体を尻目に、除夜の鐘を聞く前から、有名な、又は、近くの神社仏閣に、初詣に繰り出していた。もう、誰も、二体が闘っている空を見上げようとしなない。もちろん、暗くてわからないこともあるが。

そのことによろやく気付いた二体。これまでは、人々の視線が気になって、力を抜くことができなかったのだ。

「おい。合体塔レンジャー」

東の京タワーが胸を合わせ、がっぷり四つの、首だけ右に傾けた状態で、合体塔レンジャーの左の耳に息を吹きかけるように呟いた。

「なんだ。東の京タワー」

合体レンジャーも首を身に傾けたまま、東の京タワーの左耳に息を吹きかけるように呟く。

「除夜の鐘が鳴っているのが聞こえるか。もう。新年だ。俺も東の京に戻らないといけない。多くの人々が初日の出を見るために、登ってくるからな。なんせ、一年で一番の稼ぎ時だ」

「それは、俺たちも同じだ。この京の街の人々だけでなく、全国から多くの人が参詣に来るんだ」

「それなら、水入りではなく、鐘入りということで、勝負はお預けとするか」

「そうだな。お預けとするか」

「ほら、下を見ろ。誰も俺たちの闘いなんかを見ていないぞ」

「なんせ、お正月だからな」

「目出度いことだ」

「目出度いことだ」

二番目の鐘が鳴った。残りは百六つだ。この鐘が鳴り終わる前には、それぞれ、自分の場所に戻りたいのだった。その音を聞いて、二体は体を離した。

「こうしちゃいられない。俺は、これから正月三が日は不眠不休だ」

「それは俺たちも一緒だ」

「じゃあな。互いの都を守っていこう」

「お互いにな」

こうして、合体塔レンジャーと東の京タワーが、別れを告げた。もう二体の間には、煩悩を過去に捨て去ったかのように、憎しみも怒りもなかった。ただ、互いに闘ったという充実感だけが満ち足りていた。だが、地上の人々は、そんな二体の気持ちを誰一人として感じようともせず、ただ、自分の願いを叶えてもらうことだけを期待して、神社仏閣に足を急がせた。